

ウイリアム・ヂェイムスの認識論と形而上學

高坂 正 顯

六

我々は知ると云ふ事に少くとも二つの區別のある事を知つてゐる。一つは感覺的知識 *perceptual knowledge* であり、一つは概念的知識 *conceptual knowledge* である。今此の部屋に在つて机に向つてゐる事を意識してゐると云ふ事は感覺的知識であり、人間は死すべきものであると云ふ事を考へるのは、概念的知識である。前者は今、此の瞬間に於て我々が直接に觸れてゐる特殊な事實であり、後者は單なる現在の瞬間を飛躍した一般的の知識である。しからば此等の二つの場合に於て知るとはそれぞれ如何なる事を意味してゐるのであるか。知ると云ふ以上、知るものと知られるものとの對立が考へられるのであるが、知るものと知られるものとは如何なる關係に立つのであるか。そもそも全く性質を異にした二つの項として、知るものと知られるものがあるのであるか。むしろ知るものと知られるものとは、一つのものゝ二つの方向ではないであらうか。直線上のすべての點が常に二つの方向を有つ様に、

そして又二つの直線が交る時、その交點は同時に二つの直線の上にある様に。

知るものと知られるものとを、新カント派の人々の教へる如く、意識一般と對象との對立であるとするれば、如何にして對象は意識の内に入り來り得るのであるか。永遠に不動なる對象そのものが。對象が超越的なる價值として永遠のものである如く、意識一般も亦不變のものである時に、意識は如何にして對象に達し得るか。その時意識一般は單に對象一般の別名となるのではないか。我々が知ると云ふ時に、それは具體的の姿に於ては、現實の我々と全く絶縁された出來事ではない。現實の世界から全くかけ離れた理想の世界の出來事ではない。我々が道德の世界に住む時にも、我々が藝術の創作に耽ける時にも、我々の行爲は現實の我々に於て行はれるのである。たゞひとり我々の認識だけが永遠の世界の出來事であるのであらうか。すべての肉體的のものから解き放された我々が、道德的活動をなし、藝術の創作をするとき考へられない様に、そして又時間空間的なる意味を全く失つた者を道德的行爲の對象となし、藝術創作の基礎となし得ない様に、我々の認識も亦現實的なるものと直に結びついてゐるのではないだらうか。描かぬミケランヂェロが畫家でないならば、手の無いミケランヂェロも畫家とは言はれないだらう。そして肉體のないミ

ケランヂェロが畫家でないならば、腦髓のない認識主觀も認識するものではないであらう。勿論我々は所謂唯物論の立場に立たうとするのではない。しかし認識するものをのみ永遠のものとなし、瞬間的なる現實から全く切り放す事に同意し得ないのである。むしろ瞬間的なる現實が直に知るものゝ意味を有つのでなければならぬ。我々の肉體が道德と藝術の制作者になり得るなら、それは同時に認識の主體たるの價値を與へられてもいゝのである。認識だけを現實の世界の繼兒たらしめずに、認識も現實の一つとしたのである。藝術を、そして道德を人が産み出す様に、眞理も亦人間の創作としたのである。勿論それはプラグマティスト達が屢々、そして亦當然非難される様に、眞理を單に主觀的なる任意の産物とするのではなく、人間を深く廣き世界の上に住する者とし、人間と云ふ一つの現實を通じて現實の世界が眞理を産むのである。人間が眞理を産むと云ふのは、世界そのものが眞理を産むのである。

＊ カンパスの上に描かれない繪があるであらうか。そして音に現れない音樂があるであらうか。

知るものと知られるものとは同じ一つのものである。我々がペンを握つて紙に向ふ時、握られたペンと白き紙とが我々の意識の外にあるのではない。空間に白き

紙があり、それと離れた意識の内に白き紙の表象があり、その表象が白き紙を寫すと云ふのではない。すべての模寫説が論理的に成立し得ないばかりではなく、我々は模寫的なる表象の媒介を経る事なく、直接に對象に觸れてゐる事を信じてゐるのである。我々が握つてゐるペンは同時に我々が見てゐるペンである。對象が意識と異つたものであるならば、意識は對象そのものを知る事は出来ない。我々は眞なるものを見る事を得ない。かくては意識は、遂に對象の代用物に觸れるのみである。しかしそれが認識するものゝ運命だらうか。我々は對象そのものを知つてゐるのではなく、先に掲げた二つの認識の内、感覺的知識なるものに於ては、我々は對象そのものに觸れると考へ得る。我々の感ずる滑かな紙の感じは、紙そのものゝ感じである。きたない色の感じは色そのものゝ感じである。濕り勝な雨の日には我々の心も亦濕るのである。しかしながら人は云ふであらう。我々の心の内の火は家を焼く事は出来ない。水の表象は火を消さない。どれほど針の表象が鋭くても、人を刺す事は出来ない。表象としての針は鋭さと云ふ性質を *Intrinsically* に有するに過ぎぬに反して、現實の針は鋭さを *Energetically* に (*Essays in R. E. P. 32. P. 130* 有するではないかと)。しかし直接經驗に於ては *intrinsically* な鋭さと *energetically* な鋭さとは一

つに溶けてゐる。言はゞ *virtually* に二つの性質が區別され得るに過ぎない。そこに於ては燃える火は同時に燃えない火の意味を有つのである。それが直接に與へられたものなのである。たゞ此の自己同一なる直接經驗の一片が二つの異なる仕方に於て他の直接經驗と關係する事によつて燃える火と燃えない火、客觀と主觀、知られるものと知るものとの區別が出来所謂感覺的知識なるものが生ずるのである。感覺的知識に於て我々は主觀と客觀の合一を有つと云つた事は、嚴密には、それ故直接經驗に於てのみ兩者の合一があり得るのであつて、感覺的知識の確實性は、ただ、かかる主客同一の直接經驗に基くとさるべきである。しからば主客同一の直接經驗は、いかにして二つの異なる關係に入るのであるか。主客の對立を生ずるのであるか。

私がこゝに住まつてゐる家は何年何月、或る人によつて、材木と漆喰とから造られたものである。それは暑を妨ぎ、寒を遮るのである。造られてから今迄に何人かの人を住はせた此の家は、更に何人かの人を住はせるのである。そしてやがては他日何等かの原因によつて取毀される事になるのである。平凡な此の家にもそうゆふ歴史があるであらう。しかし此の鴨川べりの一つの家はかゝる *the history of the house* を有つと共に、一方私の經驗の内に於て一つの記憶となり *the personal biography* の一部

を形成するのである。それは他の「感覺、感情、決意、運動、分類、期待等の聯鎖を完了せしむる現在の最後の項であると共に、未來に擴がる同様な内面的活動の系列の最初の項でもあるのである。」(Essays in R. E. P. 13) 同じ純粹經驗の一片が、即ち、——それが何であるか (What) と云ふ事を未だ決定されざる單なるこれ、或はあれ (This or That) が、——異なる二つの系列に於て場を占める事により、主觀的となり、或は客觀的となり、知る者の側に立ち、或は知られるもの、側に立つのである。

しからば知るもの、側とは如何なる種類の系列であり、知られるものとは如何なる形の系列であるのか。知るもの、側とは、言はゞ、自由なるもの、側であり、知られるものとは必然なるもの、側である。今日の前に見る紅のバラは唯一無二のものであるけれど、我々がそれを紅のバラと云ふ言葉の方へ引きよせる時、現實の紅のバラは現實の制限を離れて自由なものになるのである。それは過去のバラとも未來のバラとも通ずるものとなる。單なる That であつた紅のバラは、紅のバラとしてその *That* を規定される事によつて、一方鉢に植えられた現實のバラとして認識され、と共に、他方紅のバラと云ふ概念として認識されるのである。知ると云ふ事は知られたるものを自由なもの、側に移す事を意味するのである。デヒムスは必然と

は唯一つしか許された道のなき事を云ふ (Some Problems of Philosophy P. 62) と定義したが、その必然なるものが自由に他のものによつてとりかへられ得る時、そのものは知られたものとなるのである。知るとは Taine 以來明にとかれた様に Substitution (Essays in R. E. P. 62) なのである。尤も Substitution の正しさは、感覺的なる現實の That によつて決定されなければならぬのであり、自由なる認識の世界は具體的なる現實によつて基礎づけられてゐるのであるけれど、感覺的なるものは概念的なるものに到る事によつて初めて己れを明にし、自己を實現するのである。我々は此の事を概念的認識の世界に於て明に見るであらう。

七

私は概念的知識と呼ばれてゐるものゝ内で最も簡單なものから出發したい。デ・エイムスの用ひてゐる例を使ふならば、私は今ケンブリッジの書齋にゐて、ほど近い Memorial Hall を想ひ起してゐるのである。私の心には Memorial Hall の様々の姿が浮んで來る。その外形、その内觀。私はメモリアル・ホールを知つてゐると信じてゐる。そして他の人々もそれを承認するであらう。しからばその時知つてゐるとは何を意味してゐるのだらうか。私の心に浮んでゐる心象が、メモリアル・ホールに類似し

てゐるからだらうか。たゞ類似してゐると云ふだけなら同じ會社で造られた同じ番號の針は互に完全に類似してゐる。しかし彼等は知つてゐるとは言へない。それなら私がメモリアル・ホールを知つてゐると云ふ事には單に類似してゐると云ふ以上の意味が含まれてゐるのでなければならぬ。しからばそれは何であるか。

もし人が私に本當にお前はメモリアル・ホールを知つてゐるのか、お前の説明は誤つてはゐないかと問はれたなら、私は彼を實際のメモリアル・ホールに連れて行つて、私の説明が現實のメモリアル・ホールの外觀内觀によつて裏づけられ、現存する事物によつて證據だてられるのを示さなければならぬ。私の心象が現實の感覺的なものによつて保證されなければならぬ。たとへそれが不完全なものであつたにしても、その表象は私をメモリアル・ホールに導く力を有し、その心象が一々現實の建物と對應し、そこに歸入するのである事を證明しなければならぬ。その時彼は私がメモリアル・ホールを知つてゐたと云ふ事を承認するであらう。そして我々は同時に知ると云ふ事の意味をこゝに明にする事が出來たのである。

即ち知つてゐると云ふ事は、我々がその心象によつて現實的なものゝ内に導かれる事が出來ると云ふ事である。概念的知識は我々を現實的なものに lead する。

それが知つてゐると云ふ事の意味である。概念的知識が連続的なる過程に於て現實なるものゝ内に terminate する時、terminate した終點が元來意味されてゐた對象であり、intend されてゐた目的物なのである。知ると云ふ事は、その Intention が満たされた事、failed であり、現實的なるものに連続的に歸入した事である。我々の知識はその時確保される (corroborate)。此の連続的なる過程の發點が知る者であり、終點が知られるものなのである。(—their starting-point thereby becomes a knower and their terminus an object meant or known. Essays in R. E. P. 56. 57) 知るものと知られるものとはかくして連続する。その間に何等の間隙も飛躍もない。間隙がある限り我々は未だ知つてゐるのではないのである。そしてかゝる連続の直接經驗を有つ時に、我々は知ると云ふ働を働いてゐるのである。我々が、人間は死ぬものであるとか、地球は圓いとか云ふ事を知つてゐると云ふ意味も、我々はそれを現實に於て證し得ると云ふ事にあるのである。それによつて我々が現實に導かれ、現實にたち歸り得ると云ふ事にあるのである。即ち、現實に對して我々に指針を與へてゐる點にあるのである。

一般に概念的知識と呼ばれてゐるものが如何なるものであり、如何なる構造を有つかと云ふ事、しかして如何に概念的なるものが感覺的なるものによつて保證され、

又主觀と客觀とが如何に川の流れの上と下との如くに連續するのであるかと云ふ事を、我々は以上の如くに理解する事が出来るであらう。しかしながら人は、かゝる現實的なる意味の認識に對しては、かゝる構造を規定し得るとしても、例へば、數學的認識の如き先天的知識に關しては、デイエムスの説く如きプラグマティズムによつては、遂に解決され難い問題が残るのではないかと云ふかも知れない。事實デイエムスも數學的眞理の意味に關しては、最初はそれを現實的なるものより抽象されたる單なる影の如きものであるとなし、後に到つてその獨立性を認めんとするに、到つたと云ふが如く、(The Meaning of Truth. P. 42. Note, A Pluralistic Universe P. 339—340. Some Problems of Phil. P. 50—57. 60—70. 106.) 重要な立場の變動があるのであるが、彼が關係も亦直接に與へられると、といった思想を發展せしむるなら、そこには多少の困難を藏するものの、尙ほ現實的なる意味の認識とほぼ同じ構造の存する事を示し得るであらう。我々は直接經驗の流動に於て Many in oneness を見た。A much-at-once (Some Problems of Philosophy P. 49.) に觸れた。我々は連續と云ふ形式を知つたのである。しかもその連續は斷絶を含んでゐる。一なる多であり、多なる一である。區別されたものゝ統一であると共に差別の同一である。我々は赤き色を見ると共に、赤きものと赤き

ものとの同一を見るのである。關係の項になるものが直接に與へられるばかりでなく、關係そのものも直接に與へられるのである。直接に與へられる此の連續と云ふ關係に於て、我々は又同一と差別との關係をも知るのである。論理學がもし *Substitution of similars* であり、數學的眞理が *relations of comparison and identification* を示すのみ (*Some Problems of Phil. P. 68*) のものであるとすれば、此等の所謂アプリアオリの眞理の基礎はすべて直接なるものに於て與へられてゐるのである。しかももし我々が、先に、空間の項は又空間であり、項はそのまゝ關係であると云つた事が正しいなら、我々は此等の直接に與へられたものに於て、關係の項をも持つのである。數と數との關係が數として現はれる “*The relation between two numbers is another number;” Principles of Psychology II. P. 149* と云ふ事は關係に於て、或は關係として數が成立する事を教へるのである。數學的眞理の基礎も直接に與へられるものに於てあるのである。しかしながら數學的眞理は、單に直接に與へられるとは考へられないものをも對象としてゐる。否、決して直接には與へられ得ないことさへ考へ得るものをもとりあつかつてゐる。無限なる量、すべての不合理數、それ等はいかに考へるべきであるか。

我々はかくの如き問題に實は現實的なる認識に於ても觸れてゐたのである。恐

らく我々が決して直接には見る事が出来るとは考へられない様な、遊離されたイオンと云ふ如きものをも問題としてゐるのである。しからばそれ等は如何なる意味を有つのであるか。認識の正しさがすべて感覺的なる所與によつて決定されるとするならば、それ等の認識は、はたして何處からその眞理の保證を得るのであるか。それ等は認識ではないのであるか。

我々は先に知るとは Substitution であり、しかして必然的なる現實の世界から自由なる想念の領域に入る事であると云つたが、今こゝに述べた如き非感覺的なる認識の如何なるものなるかを明にするために、その自由なる領域とは如何なるものであるか、しかして又はたしてそれが全く感覺的なるものから離れたものであるか、もし又それが感覺的なるものと關係を有するとすれば如何なる意味に於てあるか、と云ふ事を明にしなければならぬ。

八

現實の赤きバラは赤きバラと云ふ言葉の方向に引きよせられる事によつて、過去のバラ、未來のバラ、凡そすべての赤きバラと位置を換え得る處の自由なるものとなる。赤きバラと云ふ言葉を通じて、他の赤きバラと流通する一つの自由なる場處を

有つ事になる。しかればその自由なる場處とは如何なる意味を有つのであるか。現實の雜多なる連續の間から大空に星坐と云ふ言葉が彫み出され、地に平原と森林と云ふ言葉が浮び上り、時間²⁾は晝と夜と春と夏と云ふ言葉によつて區別される時に、そして過去現在未來と云ふ言葉が、すべての時間をつゝむ時に、我々は永遠に繰返され得る自由なる本質を見た³⁾と考へるのである。その自由とはしからば何を意味するのであるか。そもくそ¹⁾ういふ自由な場處があるのであらうか。言葉によつて意味される様な一つの自由な領域があるのであらうか。

千八百八十五年、*The Function of Cognition* と云ふ論文を *Mind* 誌上に掲載した際のヂ
 エイムスは感覺をのみ實在と認めたのであつたが、千九百四年に發表された “Does
 ‘Consciousness’ exist?” なる論文に於ては明に、客觀的實在と呼ぶものゝ内¹⁾に空間及び
 時間的なるもの、或は單に論理的或は數學的なるもの、或はそれ以外の理想的なるもの²⁾
 の三種を認め、千九百十年、前述の論文を *The Meaning of Truth* の冒頭に再録するに際
 しては、かつては感覺をのみ唯一の實在として取扱つたが、今に於ては概念をも、それ
 と同位の實在と見なすと云ふ註を附加してゐる。(Essays in R. E. P. 16. Note. *The Meaning*
of Truth. P. 42. Note) 彼はしからば如何なる意味に於て概念の世界を實在と見るに

到つたのであるか。

チェイムスはミュンスターヘルヒの Grundzüge der Psychologie. vol. I. P. 48 の文句を借りて、現在隣室に在る本の表象は、今面前の机上の本と共に、自分にとつて直接の實在性を有し、自分を直接に動かすのであると云ふ事。If you agree that the perceptual object is not an idea within me, but that perceptant thing, as indistinguishably one, are really experienced there, outside, you ought not to believe that the merely thought-of object is hid away inside of the thinking subject. The object of which I think, and of whose existence I take cognizance without letting it now work upon my senses, occupies its definite place in the outer world as much as does the object which I directly see.” 昨日の記憶否幼年時代の追憶も亦一つの實在として現在を動かすのである事。否 “But even were they [the objects of dreamers and hallucinated persons] centaurs and golden mountains, they still would be ‘off there,’ in fairy land, and not ‘inside of’ ourselves.” 云ふ文句をも概念の實在性を證する爲の引用句たらしめてゐる。

即ち、彼は、感覺的なるものがそれ自身としては、單なる That として、主客の別を超越してゐる如く、概念的なるものもそれ自身としては、單なる That として、主客の別を有しない。隣室の本と云ふ概念は、目前の本の感覺と等しく、それ自身としては單なる

Thatであり、感覺が直接に與へられる如く、概念も亦直接に與へられるものであるから、まづその意味に於て概念的なるものにも感覺的なるものに coordinate な實在性を與へなければならぬ。そして第二に感覺的なるものが我々に働きかける如く、概念的なるものもそれ自身直接に我々に働きかけるのであるから、概念的なるものも亦感覺的なるものと同位の實在性を有せねばならないと云はんとするのである。例へばケンタウルスと云ふ怪物の姿は多くの感覺的のものゝ集合の上に成立するものであらうけれど、即ちその Causes は感覺に基くでもあらうけれど、それが既に一つの概念的なるもの、空想的なるものとして成立した時には、それはそれ自身獨立なるものとして直接に與へられしかも又我々をも動かすのである。それは働くのである。よしんば感覺的なるものからそれが發生したにしても、それが一つの統一を得た時に、それは感覺的なる起源を忘れ、感覺的なる媒介なくして我々に働くのである。それは直接經驗の事實として直接にあるのである。我々が赤きバラと云ふ概念を造つた時、その概念はそれ自身獨立の生命を有つのである。直接にその概念が與へられ、直接にその概念が我々に働きかけるのである。それ故その概念は實在する。現實の世界には存在せざるケンタウルスも、その意味に於て神話の國に實在す

るのである。そしてもしその意味に於てケンタウルスが存在し得るなら、現實には與へられざる不合理數も、亦數學の世界に於て存在すべく、遊離したイオンも亦化學の世界に存在するのである。

我々は直接經驗の立場より見て概念的なるものが、感覺的なるものと並立する實在なる事を見た。概念の世界も亦存在するのである。しからば我々は之等の二つの世界をたゞ別々に有つのみであるか。リツケルトに於けるが如くに感覺と概念の二つの世界の分裂を以つて甘んずべきであるか。デエイムスの立場は一元的なものである事を我々は主張したのであつたが、感覺と概念の二つの世界は如何にして一つの世界をなすのか。兩者の關係はいかゞであるか。我々は概念の世界に於ては感覺の世界に於けるより自由であると云つた。しかして又概念が直接に働くとも云つた。概念が働くとは何を意味するか。概念が概念に働くのか。或は窮極に於ては感覺的なるものに働くのか。感覺的なるものは概念的なるものによつて働かれる事によつて如何になるのか。自由とは兩者の關係に於て見らるのであるか。我々は之等の關係を明にする爲に、今迄等閑視されてゐた Pragmatic Method なるものゝ意味を明にしなければならぬ。

九

概念的なるものも感覺的なるものと等しく直接に That として與へられる。Image も直接に何等かの形として與へられる。それはその概念の内容或は Image を形成するものである。しかしながら概念的なるものは直接に我々に働きかける。神と云ふ概念は我々に何等かの働を及さずにはをかかない。前者は概念の Image-part であり、後者はその functional Use and Value (Some Problems of Philosophy P. 56. 59) である。そして概念の Image-Part がたとへ感覺的なるものから成立の動機を與へられてゐるにもせよ、それ自身獨立し得るものなのである。ケンタウルスにはケンタウルスの實在性がある。しからば概念が働くとは如何なる事か。

概念が働くと云ふ事に少くとも二つの異つた意味が認められる。一つは概念が概念として認識に於て働く場合であり、他は概念が行爲を通じて實踐的に働く場合である。前者は概念の理論的働きであり、後者は概念の實踐的働きである。角をもつ金牛宮、恐るべき顎を以つて劫かす獅師宮、此等の星座にも光學の法則が適用され、黄金作りの三輪車を御して空を行く日の神アポロも引力の法則によつて支配されるものとなつた時、雜然たる神話の世界は整然たる自然科學的概念の體系によつ

てをきかへられた。自然科学的概念の體系は神話の世界に革命的の力を及ぼした。神々は數學的法則に變化した。そして神々の名によつて理解されてゐた自然界は異つた姿に於て我々に現はれた。概念の體系は自然の世界の意味を變ずるのである。概念の力によつて自然界は自己自らを異つた相に於て轉開させるのである。概念に於て自然は自己自らを見るのである。それは外から自然の世界を寫すべく差し出された鏡ではなく自然が自ら自らを寫す自然の内なる鏡である。自然は概念に於て自己を知る。概念に於て自然は眞の自然となるのである。概念は單に人間の産んだ任意な産物ではなく、自然が人間を通じて自ら自己の姿を現はしたのである。概念は單に二次的な産物ではなく、そこに於て自然が自己をより高い存在に高める高次の存在である。概念に於て自然は自己を發展させるのである。それ故概念は自然を變化させる。^{*}與へられたものゝ意味が變るのである。電雷が電氣である^{*}と知られた時に電雷の意味が變るのである。之が概念の理論的働きである。ニュウトンの思想がアインスタインのそれによつてとりかへられる事によつて、直接に我々に與へられた自然の意味が變るのである。概念はかくの如くに感覺的なものに働きかける。まことに自然科学的概念の體系は神話の世界に働きかける

ばかりではなく、それを通じて同時に感覺的なるものゝ意味をも變へるのである。概念の理論的働きたは、それ故感覺的なる雜多が、統一的なる體系に包容される事によつて、己れの意味を變へて行く處である。(尙ほ本誌六十六頁以下及び前號四十二頁を参照されし。)

* 經驗そのものが自ら自己を見る眼なのである。實在そのものが鏡なのである。實在を見るために實在の外なる鏡に實在を寫す必要はない。實在であるを云ふ事の一つの姿として知られてあるを云ふ事があるのである。言はゞ實在と實在とが互に映じ合ふのである。

** 認識が單に實在の拙劣な模寫に過ぎぬものであるならば、認識の意味はどこにあるか。認識がたゞへ實在の完全なる模寫であるとしても、完全なる實在の複製を造る必要はどこにあるか。かくの如き模寫は實在にとつて何等の意味を與へるものではない。It adds nothing to the Content of experience. It makes no difference to reality itself." (Pragmatism, p. 226) 認識に意義と價值がある限りそれは實在そのものゝ高揚でなければならぬ。ロッチエも亦概念の意味を實在の高揚に於て見るのである。(The Meaning of Truth p. 80, The notion of a world complete in itself to which thought comes as a passive mirror, adding nothing to fact, Lotze says is irrational.....)

感覺的なるものが概念的なるものを通じて自己の意味を變じ、自己を發展させて行くを云ふならば、それはどこまで發展するのであるか。アリストテレスの物理學がガリレイのそれによつてとりかへられ、ガリレイのそれがニュウトンのそれによつて更にとりかへられ、かくしてそれは無限に意味を深めて行くを云ふならば、一面

に於て實在そのものゝ無限の發展が讚美せられる事となるのであらうけれども、他面に於て我々の認識は無限に不確實であるとか、單に相對的であるとか云ふ批難を蒙る事になりはしまいか。デエイムスはかくの如き否難に如何に答へんとするのであるか。

我々はデエイムスの立場が純粹經驗のそれである事を忘れてはならない。彼は直接に與へられたものから出發するのである。直接に與へられたるものは主客合一であり、自由と必然との合一である。そこには過去の必然と未來の自由とが含まれてゐる。我々が純粹經驗の世界に住む限り、そこには無限に解決さるべき問題が藏されてゐるのである。直接經驗に於て我々には未來の體驗が與へられる。未來の體驗が與へられてゐる限り我々には道德の世界に於て、無限の課題を負はされてゐる。そして我々は單に非理論的なるものに於て無限の發展を負はせられるばかりでなく、理論に於ても無限の發展を有つのである。しかもそれは單なる理論のみ發展ではなくして、實在そのものゝ理論に於ける發展なのである。従つてプラグマティズムの認識論に於ては單なる相對的眞理のみがとかれるのではないかと云ふ否難も、理論は實在の發展であると云ふ事を考へる時に、その力を失つてしまふ。

一つの理論が一つの理論によつてをきかへられた時、そして今の一つの理論もやがては他の理論によつてとりかへられるが故に、すべての理論は相對的であると云ふのは、現在の一點に於て無限なる過去の連續が含まれてゐる事、即ち現在は無限なる過去の進展の結果である事、従つて現在の理論は過去の理論の決算であり、その意味に於て過去のすべてに勝るものなる事を忘れるものなのである。まして理論は實在そのものゝ發展であり、その高次の存在である事を思へば、現在の理論は未來の理論によつてをきかへらるゝ故に無意味であるとするのは、現在はやがて未來となるが故に、現在は實在ではないと云ふが如き抽象である。實在は現在に於て存在するのである。そして未來に向つて發展する。それ故現在は絶對のものではないけれど、他のすべてに比して勝つてゐるのである。理論も亦一つの實在であるが故に、その同じ方式が適用さるべきである。しかしてヂェイムスはかゝる方式を *Meliorism* (*Pragmatism* P. 285) と云ふ名で呼んでゐる。それは現在に於てすべてが救はれてをり完成そのものに達してゐると考へる如き樂天的なる絶對論と、すべてを無價値と見る懷疑論とに對して世界の發展を信する立場である。そこに於ては “The world must and shall be saved” とは言ひ得なうけれども “The world may be saved.” (*Pragmatism*. P. 282)

とは言ひ得るのである。世界は我々の努力なしに既に救はれ終つたものではないけれど、我々の努力によつて救はれ得るのである。世界實在、眞理は進歩するのである。それを信じないものは實在を信じないのであり、現在を信じないのである。プラグマティズムはかゝる melioristic な信仰の上に立つのである。それは自由と努力の立場である。それは *Must-Be-Philosophy* ではなくして *May-Be-Philosophy* である。

我々は認識に於て雑多なるものが統一を得ると云つた。しかしながらデュエームの直接経験はカントの與へられたる感覺の雑多の如く全く無統一のものではない。それはむしろ統一と雑多との融合である。(Some Problems of Ph. P. 51. Note) 或る意味に於ける統一である。しからばそれに對して概念的統一とは如何なるものであるか、いかなる關係を有つのであるか。我々は概念に於て自由の領域に入ると言つた。一つの赤きバラの代りに、多くの他の赤きバラを流用し得る概念的なる一般を得たのである。正しく定義された電磁氣の法則を有するならば、それによつて我々は、自由に多くの電磁氣現象の内に入り得るのである。概念的なる統一とはかゝる自由なる感覺的なるものとの交通である。概念的統一とは雑多なる感覺的のものから一つの普遍者に到る事であり、しかし逆言へば一つの普遍的なるものが、

自由に特殊なるものに於て自己を證する事である。一つの概念的なるものが正しいか否かは、それが誤なく感覺的なるものに導くか否かによつて決せられる。The essential thing is the process of being guided. Pragmatism. P. 213. 正しい認識とはそれによつて我々が感覺的なるものに導かれ得るもの、謂であり、従つてそれと共に感覺的なるものゝ意味を變へ得るものゝ事なのである。概念の有する眞理性とは之である。

しからば感覺的なるものゝ意味を變へるとは如何なる事であるのか。我々は眼前のガラス窓が水晶のそれであれよと思ふ事によつてガラス窓の意味が變るのではない。それが他のガラスと共に不良導體である事を知る事によつてその意味が深まるのである。それは電氣を遮るために用ひられ得るのである。感覺的なるものゝ意味が變るとは單にそれを異りたるものとして見る以上に、異りたるものとしてとり扱ひ得る事を意味するのである。雷を電氣の一種として見ると云ふ事は單に見るばかりでなく、電氣の一種として取扱ひ得る事を云ふのである。知ると云ふ事は單に統一すると云ふ事ではなくして、同時に感覺的なるものゝ意味が變ると云ふ事である。しかも感覺的なるものは現實的なるものでなければならぬから、感覺的なるものゝ意味が變つたと云ふ以上、變化した感覺的なるものゝ意味は、それを

現實に於て實現する事が出来なければならぬ。概念的なるものが感覺的なるものゝ意味をかへ得る事を現實に證據だてなければならぬ。言はゞ概念的なるものが感覺的なるものに働きかけ得る事を實證し實驗しなければならぬ。正しい概念とは感覺的なるものに導かれる事によつて、その意味を變ずるものであるが故に、感覺的なるものに働きかけるものゝ事であり、しかししてその事を現實に實驗し得るものゝ事である。正しい概念とはプラグマティストたるジェイムスの云ふ如く
 “It works” (Pragmatism P.) するものでありと以上の意味で言ひ得るであらう。

* ジェイムスの思想・理解せんを欲するなら、*“The Will to Believe”* を讀め、否、再讀、三讀せよと言つたロイスは、ジェイムスの經驗の意味に就て次の如くに述べてゐる。

“Experience is never yours merely as it comes to you. Facts are never mere data. They are data to which you respond. Your experience is constantly transformed by your deeds.” (William James and other essays. Josiah Royce. p. 37.)

眞理は實地に働き得るものゝ事である。それ故我々は眞理によつて現實に働きかけ得るのである。それが概念の價值である。しかしながら我々がある認識によつて現實に働きかけ得たとしても、それはその認識を現實に實驗したと云ふまでいあつて、それがその認識の眞理性を形成するものではないのである。けだし眞理の

本來の姿は現實に働きかけると云ふ事にあるのではない。眞理とはむしろ感覺的なるものに導かれると云ふ事である。それに歸着すると云ふ事である。たゞその結果、感覺的なるものゝ意味が同時に變すべきであるから、はたしてそれが現實に變り得るや否やを實驗せよと云ふまでいある。その意味に於て概念が働くか否かを實證せよと云ふのである。雷は電氣であると見た結果、雷は避雷針によつてさけられ得るものとなつた。我々はその認識によつて雷に働きかけ得るものとなつたのである。しかし認識にとつては、かく働きかけ得ると云ふ事によつてその眞理が實驗され、確證されたのみで、働くと云ふ事がそれだけで既に眞理と云ふ意味であるのではないのである。雷は電氣であると云ふ認識によつて我々は雷に對して有効に便利に働き得る。それは上に述べた概念の實踐的働である。しかしながらそれは概念そのものにとつては單に一つの實驗と云ふ意味だけほか有たないのである。概念によつて有効に、有利に働き得ると云ふ事は論理派の人々の云ふ如く眞理の二次的の性質なのである。この概念の理論的及び實踐的の二つの使用を混同する所にプラグマティズムの自ら屢々陥る誤謬と、しかして論理派の人々の慘酷なる批評とが起るのである。しかしながら我々が今決定した如く眞理概念を規定するなら

ば、論理派の批難を蒙る事なく、しかも同時に眞なる認識は實踐的にも有效なるものなる事を明にし得たであらう。我々はそれ故最後に、Pragmatic Methodの何たるかを明にする事によつて上述の説明の不備を補ひたいと思ふ。

十

Pragmatismは輕蔑と淺薄の對象たるべくして學界に送り出され、しかしてやがて埋葬された。それは何等の理想も目標も有さぬ卑俗なる現實主義として、實用主義の名を與へられた。しかしブラグマテイズムの父ヂェイムスに於けるブラグマテイズムの誕生は、カントの第二批判を思はせる如き自由と信仰との發現であつたのである。我々はブラグマテイズムに對する偏見に捕へられざらんがために、その事を忘れてはならない。彼はすべての思索するものゝ共通の受難とも云ふべき自由と必然の謎に惱まされた。そしてすべてが必然の鐵鎖に縛られてゐると云ふ氷の様な諦に陥らんとする刹那に於て「私の自由なる意志がまづ第一になすべき事は自由を信んずる事でなければならぬ。」My first act of free will shall be to believe in free will. Letters of William James, I. 147. と云ふ洞察に達したのである。ブラグマテイズムに於て所謂實用主義を見んとする人は二十八歳のヂェイムスの此の一語を想ひ見るべ

きである。

彼は “The Will to Believe” に於て、我々が神を信んずるか否かは、いづれの賽に賭を投すべきや否やであると言つたパスカルの「賭」を想起せしめ、理論的に決定し難き事に關しては、それを我々の關心と意志によつて決定するの外に道なき事、しかし又意志によつて決定し得る權利を有する事をといてゐる。けれど或る種の眞理——例とへば道德的眞理——の如きは、我々がその實現の可能を信じ、且つ我々がその實現に努力する事によつて初めて眞理となるのであるから、それが現實に存在するか否かによつて、その眞偽を決定する事は出来ない。かゝる眞理に對して、その實現を待つて後に、それを信んせんと欲するなら、彼は永遠に、その眞理に到達し得ないであらう。我々はかゝる眞理に對しては自ら眞理への道の半ば (halfway. P. 28. The Will to Believe) を歩まなければならぬ。彼を信んずる事によつて彼も亦我を信じ、彼を愛する事によつて彼も亦我を愛する様に、凡らく神も、我が神を信んずる事によつて神は我にとつて存在するに到るのである。彼の我に對する愛を疑つて永遠に彼を愛せんと努めざるものにとつては、永遠に彼の愛は閉されてゐるのである。神を信んせざるものには神は永遠に存在しない。神の存在、或は道德の眞理性と云ふ如き問

題に對しては、我々が生きてゐる限り無關心、無決定である事は出來ない。神の存在、不存在を決定せずにくと云ふ事も一つの決定であるからである。それは、*Better risk loss of truth than chance of error*” (*The Will to Believe* P. 26) と云ふ一つの決定であるからである。救はれないかも知れないと云ふ恐れのために救はれるかも知れぬ機會を失ふのである。しかしながら積極的に神の存在を否定するにせよ、消極的に神の存在を肯定する事を躊躇するにせよ、いづれにせよ神によつて救はれ得ざる事に變りはない。即ち彼は無か全體かと云ふ賭に於て無の側に賭けるのである。しかし之に反して神の存在を信じ、かつ神の下に於て働くものは、場合によつては神によつて救はれ得るのである。たとへ神の存在が虚妄であつたにせよ、彼は無の側に賭けしものに比してより多く何ものをも失ふのではない。彼は神の存在を肯定せざりしものと等しく無をもつのみである。我々は生きてある限り、生きる事に價值ありや無價値なりやの賭をしなければならぬ。しかしてかゝる全體か無かの賭に於ては、我々は、全體の側に賭ける權利を有するのである。けだし全體の側に賭けるものは、場合によつては全體を得る希望を有するにかゝはらず、無の側に賭けるものは、徹頭徹尾無を得るのみであるからである。我々は人生の有意味を信じ有意味な

らしむべく努むべきである。たとへもし人生が無意味のものであつたにしても、無意味であると意識しつつ、人生の最後の無意味に當面するより、人生の有意義を最後の瞬間まで信んずる方が勝つてゐるのである。彼は有意義に歸着するかも知れないからである。

デエイムスの「信せんとする意志」は單に實踐の世界に於てのみならず、理論の世界に於ても自己を主張する。即ち現實の所與に於て直接に與へられざるものに對しては、それが現實に與へられるのを手を拱いて待つべきではなくして、むしろそれを現實の世界に於て實現せんと試みるべきなのである。即ち假説をたて、それを現實の世界に於て現實になり得べきや否やを實驗すべきなのである。假説と實驗の深き意味はこゝにある。それは理論の世界に於ける「信せんとする意志」の現れである。そしてそれは我々の自由と發展を信んずる事であり、新なる領域へ進出を試みる事なのである。

プラグマティズムは自由の哲學である。行の哲學である。彼自らも Pragmatism を云ふ言葉の代りに Practicalism 或は Activism を云ふ言葉を用ひてゐると云ふ。(Kant-Studien XXXII. Carl Stumpf, William James nach seinen Briefen S. 229. 232) 認識する事も亦働く事な

のである。創造する事なのである。しかして創造するためには我々は信んじなければならぬ。そしてそれを現實にする事によつてその信の正しさを證すべきなのである。その信仰或は假説に對してその正しさを産み出すべきなのである。我の人格が自らを尊くし正しくする事によつて人格に尊嚴と價値を與へる様に、真理もそれを現實に於て證する事によつて、正しくされるのである。此の意味に於て真理も亦創造されるのであり、産み出されるのである。我々が真理を造るのである。そして同時に實在が我々を通じて真理を造るのである。もし善と美を我々が造るのであるならば何故眞のみ我々は創る事が出来ないのであるか。真理も亦他の善きものと共に A sort of Good である事は出来ないのであるか。デエイムスが極言して真理は健康が我々にとつて善であると同じ意味に於て善である。そして健康がよきものであるが故に ought to realize すべきであるが如く、真理も亦その意味に於て實現すべきであると言つたのが言ひ過ぎであるとしても、我々は真理も亦他の善と共に一つの善であるとする事に幾分の同感を感じずるものなのである。* 彼が、"Truth happens to an idea. It becomes true, is made true by events. Its verity is in fact an event, a process: the process namely of its verifying itself, its verification. Its validity is the process of its validation."

Pragmatism, p.201 と説き眞理も亦生するものであり、確證の過程が即ち確證であること云つた事を私は輕々しく否定し去るにしのびない。

* "Truth for us is simply a collective name for verification processes, just as health, wealth, strength, etc., are names for other processes connected with life, and also pursued because it pays to pursue them. Truth is made, just as health, wealth and strength are made, in the course of experience". (Pragmatism, p.218) をデヒムスは言つてゐる。

眞理は正しくあるのではなくして正しくされるのである。我々は何等かの觀念をすべての現實的なるものとの關係を離れて、單獨に眞理として與へられるのではなくして、現實的なるものとの關係に於て眞理として有つのである。既に我々は眞理は實在の發展であり、高次の實在である事を見たのであるが、概念が實在である限り、それは感覺的なる世界に於て自己を實證せずにはをかないのである。實在するものは實在する限りに於て何等かの働を働かすにはをかないのである。實在であること云ふ事はそれが働くこと云ふ事である。そしてそれが、その實在のもつ意味である。概念の意味とはそれがいかに感覺的なるものに働くかと云ふ事である。そして感覺的なるものが、それに對して如何なる反動を現はすかと云ふ事なのである。

"To attain perfect clearness in our thoughts of an object, then, we need only consider what conceivable

effects of a practical kind the object may involve-what sensations we are to expect from it, and what reactions we must prepare." (Pragmatism, p. 47.) 又主張する Peirce, 及び James のプラグマティズムの原理は以上の意味に解されても、大した曲解ではないであらう。

しからばかゝる關係を感覺的なるものと結ぶ以前に於ては概念的なるものは如何なる意味を有つのであるか。それははたして存在するのであるか。我々は前に概念に (Image)-part 又 Functional Value との區別のある事を言つた。我々は概念の働から抽象して尙 (Image)-Part の存する事を考へ得るのである。しからばかゝる (Image)-Part とは如何なるものであるのか。

我々は知るものと知られるもの、即ち主観と客観とが一つの線の起點と終點と云ふが如く、概念的なるものより、——勿論その間に無限の概念的媒介物を想定し得るのであるが——感覺的へ移り行く過程に於て存在する事を述べた。従つて、あらゆる他のものとの關係を離れた概念的なる絶縁體は、主観客觀の區別の内に入らず、當然知るものでも知られるものでもない。しかし又それは眞でも偽でもない。けれど概念の眞疑はそれが感覺的なるものに於て實證され得るや否やにあるのであるからである。それ故概念の單なる Image-part は知るものでも知られるものでも眞

でも偽でもないのである。それは單なる「That」であり、マイノングの唱へると云ふ「假定」であり、ホルフアノ一の云ふ *Satz an sich* に類するものなのであらう。それは直接經驗に於て與へられる一つの素材なのである。我々はその幻の如き世界から一步を現實の世界にふみ入る事によつて、そこに主觀と客觀、眞と偽、保存さるべきものと廢棄さるべきものとの對立を見るのである。命題自體は眞理自體或は虛疑自體となるのである。尤もデイエムスに於ては眞理自體及び虛偽自體は完全にそれ自體に於てあるのではなく常に主客の對立と共にあるのである。眞理及び虛偽は實在を離れてあるのではなく、それは實在に依つてあり、實在であるのである。虛偽は否定されて行く實在であり、眞理は發展して行く實在なのである。虛偽の實在は否定される處に己れの意味をもつのである。

我々は以上に於てデイエムスが實在と認識、客觀と主觀、眞理と虛偽について如何に考へてゐるか、或は彼の立場に於て如何に考へるべきであるかを述べた。我々は最後に彼が實在を如何に考へてゐたかに就て述べなければならぬ。言はゞ彼の認識論に對してその形而上學を述べなければならぬ。しかしながら我々は既に

彼の哲學が如何に連續的であり、移動的であるかを見た。如何に在るものは知るものとなり、知るものは在るものとなるかを見た。感覺は概念となり、概念は再び感覺に於て己れを現實にするかを見た。即ち彼の認識論はやがて形而上學であり、彼の形而上學は認識論を離れて成立し得ざるものなる事を明にした。即ち我々はリッケルトの壁がいたる處に於て連續的に乗り超えられてゐる事を見たのである。それ故我々は最後に彼デイエムスがいかなる點に於てヘーゲルと異なるかを論じて此の一篇を終り度い。

以上述べた事によつて第一にデイエムスの立場は進歩發展を多く未來の哲學として、ヘーゲルの完成せる過去の哲學と異なる事は明である。即ちデイエムスは時間の實在を信じ、感覺的なるものと概念的なるものとを同位に置くのである。

第二に我々はデイエムスの立場が一元論絶對論なるヘーゲルのそれと異り、多元論相對論である事に注意を惹きたい。即ちヘーゲルが絶對を置く處に彼は相對を置くのである。完成せる現在を置くかはりに、未來ある現在を置くのである。宇宙の未來を多く點に於て即ち、常に新なる出發點、創造を多く點に於て彼は既に多元的である。進歩を認むる點に於て相對的である。神も亦己れに對して外々しき何も

のかを有つのである。神も亦己れ自らを實現して行くのである。神は惡を含むものではなくして惡のうち勝ち行くものなのである。神にとつても宇宙は完成し終つたものではない。神は常に創造する神なのである。プラグマティズムの體系に於てはすべては彫塑的なのである。“To a certain degree, therefore, everything is here plastic” (Pragmatism, p. 61) 認識の世界にすら絶えず新なる創造が行はれるのであり、新なる視野が開かれるのである。神すら新なる真理の創造を有つのである。真理の世界も多元的である。彼の云ふ如くそれは Noetic pluralism (Pragmatism, p. 166) なのである。實在が多元的であると云ふ事は、最も明に道德の世界に於て我々に示される。道德の主體は決して我のみではなくして同時に彼でありしかして我等であり又彼等である。個別的なる人格、特色ある人格を無視して我々は道德の世界を考へる事は出来ない。道德の世界は個別的なる人格によつて維持されるのである。我々は「宗教的經驗の諸相の内に於て次の如き表現をすら見るのである。

“You see now why I have been so individualistic throughout these lectures,.... Individuality is founded in feeling; and the recesses of feeling, the darker, blinder strata of character, are the only places in the world in which we catch real fact in the making, and directly perceive how events happen, and how

work is actually done." (The Varieties of Religious Experience. p. 501. 502) 實在は個別的なるものに於て發展するのである。

以上に於て我々はヂエイムスの認識論と形而上學の大體を見た。しからば我々はかゝる思想に對して如何に考へるべきであらうか。ヂエイムス自ら自己の思想を一層嚴密に、又體系的に述べたき希望を有しつゝ、その希望をはたす事なくして此の世を去つたのであるが故に、彼の思想には多くの點に不備の存する事は免れ難い事である。且つ比較的自由に彼が思索した結果として傳統的なる思索に慣れた眼からは、多くの疑問が呈出される事になるであらう。しかし私には彼が生命の真相に比較的近づいてゐた事と云ふだけは語る事を許るされるであらうと思ふ。たゞ彼は餘りに生命の動的なる方向にのみ注意を専らにしたために、生命の靜的なる方向、例へば美、或は藝術と云ふ如きものゝ理解に關して極めて足りない處がある。美に就て如何に考へるべきであるか、彼はそれに就ては殆んど釋き及ぶ處がない。又彼は認識と云ふ言葉に於ても主として自然科學的認識を考へ所謂「働く」と云ふ意味の少なき歴史的認識に關して顧慮してゐないと云ふ缺點に陥つてゐる事、田邊教授

の指摘された如くである。まして彼の哲學は創造の哲學であり、業の哲學であり、しかして眞の意味に於ける創造は無からの創造である事を思へば、しからは無に就て如何に考へるべきであるか。もし彼にして眞に創造の源をなす處のもの即ち無限に靜なるものに對するいくらかの顧慮を惜しまなかつたならば、彼の哲學はその根柢に於て一轉回をしはしなかつたであらうか。私は Emilie Boutroux がその“William James”なる一著述の最後に掲げたデカルトの言葉をかりて、此の不備なる一編の結尾としたい。

“We should not conceive any preference or priority between the understanding of God and His will.” Emilie Boutroux : William James p. 126. (Translated into English by Archibald and Barbara Henderson) — (昭和三年五月十四日) —